

和歌の歴史について

― 転換期としての『新古今和歌集』 ―

後鳥羽院の下命により撰集された『新古今和歌集』は、藤原定家や源通親らが供奉した四度目の熊野御幸からの帰参直後に、本格的に編纂が開始された。巻十九「神祇歌」及び巻二十「釈教歌」には、これまでの勅撰集には載ることのなかった、神仏自身が詠んだ和歌が撰首されている。熊野をはじめとする神詠の順列に苦慮したことが藤原定家の日記『明月記』で記されていることから、その影響は、神仏を含む当時の国土観を考える上で、重要なものではなからうか。

神代から続く和歌の歴史がどのように語られ、その世界の構造にいかにかに統一性が与えられたのか。

勅撰集『新古今和歌集』の編纂過程を通じて検討し、日本中世の神仏観の構造の一端を説明する。

講師

石黒志保

山形大学人文社会学部講師

2023年8月8日(火)

場所：奈良女子大学 文学部 S 棟
S327 教室

申込み不要・参加費無料

時間：15時～17時

問合せ先

西谷地研究室 seibi@cc.nara-wu.ac.jp

主催

奈良女子大学 古代学・聖地学研究センター